

# 法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-16

## 一石三鳥

浅井, 辰郎

---

(出版者 / Publisher)

法政大学地理学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

JOURNAL of THE GEOGRAPHICAL SOCIETY OF HOSEI UNIVERSITY / 法政地理

(巻 / Volume)

4

(開始ページ / Start Page)

3

(終了ページ / End Page)

4

(発行年 / Year)

1956-05-01

# 一石三鳥

浅井辰郎

現実には流され、專向筆頭に促われて、やゝもすべし理想を見失い勝つる自  
かにとつて、卒業式における文四総長の式辞はこゝろなき光明である。この印  
象を最初に強く受けたのは確か昭和26年の式であつた。記憶に誤がなければ  
総長は小ノ崎向に立ち、戦後の地力本質的且日本経済を具体的に論じ、特  
に朝鮮動乱ブームの悪影響を鋭く指摘されて、卒業生に苦しくても国の自主  
独立を担う人間であることをじゆんじゆんと要望されたのであつた。その論  
旨は世界状況から青年何人の理想に及び、雄大且つ精緻なものであつた。27  
年の式では雑誌「法政」によれば、総長は映画「エヴェレスト征服」を引用  
され、人生とはどうしても踏えぬばなうぬ山であり、それが険阻であるから  
と云つて辞退することの出来ない山である。ハント隊長以下の万一にも失敗  
しまいとする覚悟と用意こそ人生においても失敗しない要訣であると、主に  
青年何人に対する激励の言葉を述べられた。30年春には再び日本経済の  
苦しい現状を分析された後、世の中に「戦争さえなかつたら」という諦めの  
声があるのはやむを得ないとしても、いやしくも「青年日本の代表者」たる  
わが卒業生は、進んで戦争をなくしようと考えなければならぬと、若人が  
自ら築く日本への開る希望を強調されたのであつた。

所がである。今年の式辞はわが耳を疑う位深刻さに充ちたものであつた。  
曰く、「3900人の卒業生の中、就職出来ると推定されるものは50~60  
%である。――数日待つていれば好転するかと言えばそれも断然ノーである。  
その理由は大学を出たインテリは社会に馴染く及び、その能力は決して昔の  
ように特殊能力として買われぬいからである。と云つて就職を辞することは  
人間を辞することである。――

こゝで極めて残酷な言葉ではあるが、われわれの知識的労働力をいかにする価  
格でも売るよう諸君に決断をお願いしたい。と衷心苦しげに述べられた。

さてこの就職状況状況は層間部だけの問題であろうか。マス部でも最近の  
地理学科の学生を見ると、層間部かなくても済む者は別として、ゆきたくて  
も職は得られず、僅かに浮動的なアルバイトで苦学し、遂には卒業証書を手に  
せず脱走したものも、後になつて判つたのが実態なのである。また本  
年の卒業生も新しく同意の好意で就職出来そうではあるが、未定の状態である  
要するに総長の悲痛な叫びにマス部も例外ではないのである。

さて結論を急ごう。それはこの際、法政地理学会をして就職に際しても種

極的に勤めるような大家族の体勢にすることである。私は前にこのマノ号一  
笑はこのノ号という呼び方はセクト的な感かして嫌いだが——にしん山  
万里」と題し、東亜同文書院学生に対する同窓生の親身も及びぬ援助の状況  
を短く紹介し、わが宏政地理同窓も後進を引き上げるようお願いしたことが  
ある。今や時勢はその頭の何層倍も切迫したのである。この具体策としては  
まず何をおいても昭和ノ号年 地理学科の講義開始以来、高師師、旧制新  
制大学、大学院の区別なくすべての卒業生を含んじ五十音順の名簿を作るこ  
とである。細かいことだがこの目的のためには卒業年次や出身学制は本人名  
のあとに附けるだけで分類の指標にすることは避けたい。又就職等社会的発  
言力に對して生年月日又は年令を入れることも、従来の名簿の型を取つて有  
益かつおもしろいであらう。幸に内には秋岡、岡山、渡辺光、多々先生など  
創立当初からの先生の要望も很強く、外には戦前の同窓生の切なる連絡希  
望の聲がある。この棧を逸せず、師弟の別なく、力を協せて、正に一石三鳥  
のこの現実的要望を早急に実現したいものである。

この補に書きたい地理学的諸問題をわが地理学会誌に望む事項も少なくない  
が上述のことは緊急中の緊急事と考え、あえて乱文を續す述べた訳である。

## 就任に當って會員諸兄へ

小川 徹

昨春、光輝ある宏政大学文学部地理学科の一員たることを許されてから、  
丁度一ヶ月、生来の不敏に加えて十一年の空白を背負ひ、そのハンディキマツ  
フをいかにして償うかと、明け暮れ思い惑ひ、いわが要我選中で、その日その  
日を送つてきた私です。一年の戦績はもろろん、筋力でいへば異星の連続で  
いきさの梅人でも取り返せず、切迫の学生未休厥も重い気持ちでおりなした  
ところ、思いかけず秋岡先生のお話で、来年度（つまり本年度）から、さら  
に教授として勤務すべき由、学校当局で決定されたと承つて、名譽に感激す  
るに前に、責任の重大さを痛感せざるをえませんでした。もとよりノ伯の微  
粒子にすぎない私です。あまりに責任を痛感しすぎるのも、かえつて、担所  
からみられたらおかしなものかと思ひます。いきさら申すまでもなく、本学  
地理学科は、その昔、といつても私の知る限り、いきさら又の早余年前です  
が、当時数のまだ少なかつた私学の地理学科としてすでに東都に名をはせて  
いたと思ひます。實際、そこに集る人々の學風において、その合理的前進  
的特色は、官学に期待することのできない若々しい新鮮味となつていました。